

2 学校研究

(1) 研究主題及び副主題

自ら学ぶ子をめざして — 子ども主体の算数科の授業を通して —

(2) 研究主題及び副主題設定の理由

まず、子どもたちが生きるこれからの社会は、加速度的に変化し、より複雑で予測困難な社会になると考えられる。このような変化の激しい時代を生き抜くために子どもたちには、変化を前向きに受け止め、らが主体となって様々な社会的変化を乗り越えていくことができる資質・能力が必要になってくる。そのためには、自ら課題を発見し、友だちと力を合わせて、主体的に解決に向かっていく力をつけていく必要がある。

これまで行われてきた「一斉講義型」の授業は、「与えられた課題を正確に解く」ことが重視された工業社会（Society3.0）においては有効であった。しかし、そうした学びだけではこれからの「予測困難な時代」を乗り越えることはできないと言われている。「Society5.0（超スマート社会）」を生き抜く力を子どもたちに養っていくには、これまでの学校教育の在り方を根本的に変えていく必要がある。つまり、授業をつくる主語を変えるのだ。今までは「授業をつくる」というと、その主語は教師であることが多かったように思う。教材を準備し、発問し、授業形態を整えていたのは、主に教師であった。これらのことをなるべく子どもに委ね、子どもを主語にした「子ども主体の授業」を実現していくことが「予測困難な時代」を乗り越えるためには必要不可欠であると考え、研究主題及び副主題を「自ら学ぶ子をめざして—子ども主体の算数科の授業を通して—」と設定した。

(3) 研究の重点

- | |
|--------------------------|
| 重点1 数学的な見方・考え方を働かせるための工夫 |
| 重点2 自己決定の場の設定 |

子どもを主語にした「子ども主体の授業」を行うためには、子ども自らが選択・判断・決定する「自己決定の場」を設定していく必要がある。例えば、今までは、ペアやグループで学習するタイミングを教師が指示していたのを、子どもが自分で判断して、一人で考えたり、まわりの人と一緒に考えたりするタイミングを選択するということだ。なるべく多くのことを児童に委ねていくことが「子ども主体の授業」につながっていくと考えた。

しかし「個別最適な学び」を求めるあまり、授業の形式だけに目を向けていては、授業のねらいに迫ることはできないだろう。そこで重要になってくるのは「数学的な見方・考え方」を働かせることである。数学的な見方とは「問題を解くための着眼点」であり、数学的な考え方とは「問題を論理的に考えたり、大切な考え方をまとめ、まとめた大切な考え方を使って問題に発展させていったりする思考方法」だと考える。数学的な見方・考え方を働かせて問題を解決し、発展させることを続けていくことで、さらに数学的な見方・考え方が豊かになっていく。そうすると、数学の学習を自分で進めていく力も身に付いていくと考えている。

以上のことから、今年度は、重点1「数学的な見方・考え方を働かせるための工夫」、重点2「自己決定の場の設定」とし、児童主体の授業に迫っていきたいと考えている。

(4) 研究の進め方

- ・算数科を通して、主題にせまるための手立てや教材研究を深める。
- ・日々の授業で研究を進め、研究授業で重点について検証する。
- ・本校のめざす児童像に対して、国・県・町の学力調査や校内学力調査の結果や学習アンケート結果をもとに、児童の実態を把握し、授業改善の方向性を共通理解する。